

ウエルビーイングな社会に向けて

～「利己」から「利他」へ～

ボーイスカウト港第1団
名誉団委員長 杉原 正

(はじめに)

21世紀も四半世紀が過ぎようとしており、時の流れの速さを感じます。異常気象で世界各地に大雨による洪水や日照りによる干魃に見舞われるなど地球環境の劣化現象が頻発しています。

また「ヒト」、「モノ」、「カネ」、「情報」が国境を越えて自由に行き来するグローバル化の反動といえるのか、「アメリカ・ファースト」に始まり、ロシアのウクライナへの侵攻、イスラエルによるガサ地区への攻撃による中東紛争への動きなどの一国主義が台頭し、人命や人権に関わる大きな問題に進展しています。

4年前には、誰もが予期しなかった新型コロナ・ウイルス感染症が全世界を席卷（せっけん）しました。

日本でも「3蜜の禁止」などの施策によって日常のスカウト活動も制約を受けました。学校生活でも大きな影響を受けたスカウトが熱心に努力を続け、併せてリーダーの創意工夫によってこの難関を乗り越えられたことに感謝し、関係者の尽力に敬意を表します。

(AI—人工頭脳—の開発)

生成AIについては、かつて将棋界での棋士とAIによる対局、また将来自分たちの職業（仕事）がAIによって取って代わられるなどの話題でした。

しかし、2年まえの11月、米国のオープンAI社によって対話型AI「チャットGPT」が公開され、日本でも短時間で100万人を超える利用者があることで脚光を浴びました。

AIの急速な普及が進むなか、AIの功罪についての議論が始まり、EU（欧州連合）や国連でもAIのリスクを避ける法規制の検討も進んでいます。

AIの開発は、教育界にも大きな影響を及ぼしており、AIのリスクの一つとして人間として“考えること”の欠落がある、との指摘もあります。

フランスの哲学者パスカル（教育哲学者）は、“人間は考える葦である”の名言を残しています。葦は、水辺に生えるススキに似た多年草。湖沼や河川で強い風を受け、左右・前後に大きく揺れても毅然として立つ様子を“考える葦”とした。葦の読み方“アシ”ですが忌み言葉として”ヨシ”とも読みます。

古来、“葦（ヨシ）の髄から天井のぞく”の言葉があり、見識が狭いことで、よく考えないことに通じます。

哲学者（ギリシャ哲学）で東京大学 納富信留教授の“人間はみんな哲学者だ”また“哲学とは、我々がより良く生きるために、どうすべきかと考えること”の言葉は傾聴すべきことと思料します。

AI の開発と普及で、それに私たちはただ追従するのではなく、人間としてよく考えること事を大事にして進みたいと思います。

（君たちはどう生きるか）

今年 3 月、米アカデミー賞の発表があり、日本の映画がダブル受賞となり話題になりました。そのひとつが長編アニメーション賞を受章した宮崎駿監督の“君たちはどう生きるか”であり、宮崎監督は 4 月には米誌「タイム」の毎年恒例の「世界で最も影響がある 100 人」の 1 人に選ばれています。

元々の“君たちはどう生きるか”は、1937 年に「日本小国民文庫」の 1 冊として新潮社から吉野源三郎の小説名で出版されています。

当時、日中戦争が勃発し、世の中が混沌とする時代に、これから“君たちはどう生きるか”を問うています。

主人公は、コペル君の愛称で呼ばれる中学 2 年生と大学を出た彼の叔父さんとの交流を背景に、特に若者に人間としてこれからの生き方を問うテーマであります。

一方で同じ 1930 年代に創始者ベーデン・パウエル卿は、最も愛するスカウトに“スカウト諸君！”の呼びかけで始まる「最後のメッセージ」を残しています。

（最後のメッセージ）

「最後のメッセージ」の冒頭で“私は、非常に幸福な人生を送った。それだから、君たち一人ひとりにも、みな同じように幸福な人生を、送ってもらいたい。と願っている。

“神様は、私たちが幸福に暮らし楽しむようにと、この素晴らしい世界に送って下さったのだと、私は信じている。”

“お金持ちとなっても、社会的に成功しても、我儘ができて、それによって幸福にはなれない”（中略）

“しかし、幸福を得る本当の道は、他の人に幸せを与えることにある。”

B-P は、“他の人に幸福を分けることで真の幸福を得ることができる”と私たちに示唆しています。

また、幸福については、彼の著書“ローバーリング・ツウ・サクセス”（成功への遍歴）で“自分のカヌーは自分で漕げ”と説き、その口絵では「成功」とし

て目指す <目標、目的地>を「幸福」(HAPPINESS)と図示しています。
この口絵は、ローパーリング・ツウ・サクセスの指標でもあります。

団で活動するローバースカウトまた同年代のリーダーには是非“ローパーリング・ツウ・サクセス”を精読して欲しいと願っています。

(ローパーリング・ツウ・サクセス)

1922年、“ローパーリング・ツウ・サクセス”の出版にあたり、B-Pは愛息の長男ピーターにつきのような手紙を残しています。

親愛なる長男ピーターよ、16歳になったから読むように丁度長い手紙を書き終わったところです。それは「ローパーリング・ツウ・サクセス」(Revering to Success)という私の本です。

その本の中には父親としてお前に話してあげたい事が一杯つまっています。

—そして、それは他の少年たちにとっても同様に立派な人間として知らなくてはならないことを書いています。皆なに読んで欲しいから出版したわけです。

しかし、とりわけお前には是非読んで欲しいと願うし、人生の道標として欲しい。それには多くの知識と忠告が記されている。それは私自身が若者として必要としたものだった。—

私には、それを与えてくれる父親がいなかった。私が3歳の時に父親は他界した。

思うにお前が16歳になった時、父親(注・B-Pは高齢)がいなかったら、多分この本が助けになると思う。どう思うかな。

愛をこめて父より

1922年3月22日

(7年先のピーターの誕生日に宛てたもの、B-P 65歳)

ローパーリング・ツウ・サクセス“の出版は、1922年ですが、日本連盟(当時は少年団)では、1926年7月に「青年健児読本」という書名で和訳出版しますが、この和訳作業については、ローバースカウト達の協力がありました。

戦後の1967年5月、日本連盟の指導主事や指導部長を務められた中村知氏(愛称はち～やん)の翻訳で「ローパーリング・ツウ・サクセス」名でボーイスカウト日本連盟から出版されます。

<訳者のことば>として、“8～9年がかりの懸案だった本書の新訳を終えて、私は本当にうれしい。けれども英語専攻でない私として、誤訳はまぬがれまい。ただひたすら、B-Pの心に触れ、それを感受し、それを伝えたいという一念に没頭したことだけは私の正念だった。”と記しています。

また、この訳本の刊行にあたって、当時の久留島秀三郎総長は、<刊行の辞>の最後で、“本書は、スカウティングの第4番目の部門であるローパーリングの原理によって、青年が一人でも多く幸福になるように説いている。特に注目すべきことは、ローパーリングと宗教との関係である。私は、この原理に基いてわが日本に適應する方法を見出し、それによって優れた世界公民が育つように望んでやまない”とされています。

私は、総長のこの言葉を深く、重く受け止めており、ローパスカウトやリーダーには、改めてこの本の再読を奨めます。

(ウエルビーイングな社会)

私が生まれた1930年代の後半、軍部(とくに陸軍)が台頭して政治に関わり、資源の確保の名目で大東亜共栄圏(東アジアが一つとなる構想)の樹立に進む時代に吉野源三郎による“君たちはどう生きるか”が出版されます。

一方、ヨーロッパでは、力を用いて国内の政治改革を進め、国民の自由を制限し、軍備を拡充して対外侵略を行う「ファシズム」が生まれつつあるなかで、B-Pは“幸福な人生を送る”ことを「最後のメッセージ」で後に続く愛するスカウト達に残しました。

時代が大きく動いているなか、吉野源三郎とB-Pは、“君たちはどう生きるか”“幸福な人生を送ること”への提起をしました。

また、その一時代前には“雨にも負けず、風にも負けず”の詩などを残した詩人宮沢賢治は、その著書「農民芸術概論綱要」で“世界が全体、幸福にならないちは、個人の幸福はあり得ない”として、人は自己のみならず他者の不事をも悲しむ。また、他人のみならず他の生き物、さらに宇宙の苦しみを悲しむ、つまり共感(Sympathy)が人の本性である限り、「世界」が幸福でなければ、「自分」も幸福でない。”としています。

100年後の2020年代になって「ウエルビーイング」(Well-Being)の言葉がよく使われるようになり「現代用語の基礎知識」では、2024年度版からこの項目を立て、<暮らしの幸福度あるいは充実度が高い状態のこと>と説明しています。

分かり易くいえば、「みんなが幸せになれる社会」と受け止め、その実現に向けて私たち一人ひとりがその生活や生き方を「利己」から「利他」に変容することが期待されています。

(おわりに)

21世紀も四半期が過ぎようとしています。21世紀を迎えるに当たり、国連で教育・文化活動を担う「ユネスコ」では、21世紀の教育について委員会を設置して協議しました。3年余り協議を経ての報告書の主題(タイトル)は、「教育」ではなく「学習」で、副題は“秘められた宝”であり、報告書の中核は「生涯学習」と「学習の4本柱」でした。

“何を学習するのか”、それらは先ず、理解の手段を獲得するための「知ることを学ぶ」、次いで自らの置かれた環境の中で創造的に行動するための「為すことを学ぶ」であり、第3の柱は、社会のすべての営みに参画し、協力するために「(他者と)共に生きることを学ぶ」、そして最後に、先の三つの柱から必然的に導き出される過程としての「人間として生きることを学ぶ」が挙げられています。

“学習する”には、新しくなる、変容することが期待されており、学習することにより本人が変容し、また周りが変わることが望まれています。

”知ること”と”為すこと”の学びは、伝統的に主としてフォーマル教育である学校教育が担い、”共に生きること” ”人間として生きること”の学びは、ノン・フォーマル教育として、例えば青少年団体などが補完する役割を持つこととされた。

これを受けて世界の大きな青少年団体であるYMCA、YWCA、ボーイスカウト、ガールスカウト、赤十字社などの代表者によって「21世紀の青少年の教育(The Education of Young People) — 21世紀の夜明けにあたっての声明—」を発刊して、このことを確認しています。

「他者と共に生きること」「人間として生きること」を学び、体現することを命題とするスカウティングに共鳴して活動を続けています。私たちはこの機会にもう一度、前記の先人たちが残した“君たちはどう生きるか” “幸福を得る本当の道は他の人に幸福を分かち” “世界が幸福でなければ、自分も幸福ではない”の真意を汲み取り、銘記してこれからのスカウト活動に取り組み、ウェルビーイングな社会(みんなが幸せになれる社会)の実現に向けての努力を続けたいと思います。

2024年5月11日
2024年度育成会総会資料